



私の
**なんとか
しなきゃ!**

Vol. 34

PROFILE

東京都出身。千葉県館山市在住。魚の豊富な知識と経験に裏付けされた話で、子どもたちを中心に、魚や海、自然への興味を引き出し、魚食と環境保全への理解が増すよう、全国規模で講演を展開。2010年12月に田沢湖で絶滅したと思われていたクニマスの生息の確認に貢献。「なんとかしなきゃ! プロジェクト」著名人メンバー。

小学2年生の時です。昔から絵を描くのが好きでお絵かき帳を持ち歩いていたのですが、友達がそこに墨を吹きながらウルトラマンと闘う「タコ」の絵を描いたんです。「世の中にこんなにかわいい生きものがいたんだ!」と。運命を変えた衝撃的な出会いでした。

すぐに学校の図書室に駆け込み、床いっぱい図鑑を並べて、無我夢中でタコについて調べました。そしてやっぱり本物を見たくってお魚屋さんに行き、母に頼み込んでそれから毎日のようにタコ料理。1カ月くらい続きました。休みの日には親せきの家がある千葉の海に出かけるようになり、海には本当にいろいろな生き物がいることを知りました。それからは、どんだんのめり込んでいきました。

お魚屋さん、漁師さん、海のそばに住む子どもたち…。大人も子どもも関係なく、みんなが海の“先生”!いつもお魚のそばにいる皆さんから、本当にいろいろなことを教えていただいています。大好きなタコが、遠いアフリカから輸入さ



五感で感じるつながり

さかなクン

東京海洋大学客員准教授

Sakana kun

れていると知った時は驚きました。日本は海に囲まれていて、4,200種類以上のお魚がいるのに、なぜ海外から輸入しているのだろうと。日本の海の向こうにある世界に、自然と興味を持つようになりました。

そして今年の5月、ついに、人生の原点であるタコの特産地、セネガルに行くという夢がかないました。アフリカの海ではどんなお魚と出会えるのだろうと、出発前からそれはもうワクワク!でギョざいました。

約1日かけて首都ダカールに着くと、まさに“ギョギョ”の連続。そこに待っていたのは、一面に広がる大きな海。きちんとした港もなく、砂浜から木製のボートに乗って漁に繰り出す漁師さんたちの姿はとてたくましく、自然と共存して生きていらっしかったです。

カキやタコを捕る漁師さんのお仕事はとて大変そうに見えましたが、歌ったり踊ったり、楽しそうに働いている姿に元気をもらいました。また、タコつぼや貝殻で作った漁礁が海に設置されて

いることにも感動しました。天然のお魚を取り過ぎないようにと養殖にも積極的に取り組まれていて、まさに日本の目指している“持続可能な漁業”の姿がありました。

現地で印象的だったのは、決して裕福とはいえない生活の中で、会う人みんなが前向きで、笑顔を絶やさないということです。仕事でも、日々の生活でも、みんなが助け合って生きている。今の日本で忘れられつつある思いやりの精神がそこにはありました。

今回のセネガル訪問を通じて、たくさんの素敵な“ギョ縁”をいただきました。現地で感じたつながりを、これからもできる限り多くの場で日本の皆さまに伝えていけたらと思っています。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で